

社会教育事業への大学生の参画促進について

日本大学国際関係学部 地域社会交流部KOMPIS

指導教員：助教 松浦康世

参加学生：川口花恋、山本響、渡井祐実、
牧慎太郎、戸高晃

1. 要約

三島市は、地域住民と連携・協働して社会教育事業を進めていくため、これまでも小中学校や民間社会教育団体等と活発に連携を行ってきたが、今後は人材や情報・技術等の資源を有する大学等との連携を進めるよう計画しており、昨年度より取り組みを始めている。本研究は、大学生の社会教育事業への参画を促進するため、部活動として事業に参加している大学生の活動の実状を調査し、意見を収集することにより、行政と大学生の双方のニーズに即した持続可能な協働のあり方を考察する。

2. 研究の目的

地域の絆や体制づくりに中心的な役割を担う社会教育事業に関して、行政と教育機関と民間が効果的な連携を図る必要がある。事業を推進するためには大学生の参画も求められており、昨年度より日本大学の学生団体「地域社会交流部KOMPIS（以下、KOMPIS）」が部活動の一環として社会教育事業への参画を開始した。大学生の参画が地域にとってどのような意味を持つのかを明確にするため、行事に参加した生徒児童と保護者の感想等を調査し、その分析結果を2018年度末のふじのくに地域・大学フォーラムにおいて報告した。本研究は、2018年度の研究を更に発展させ、参画の意義を「大学生の意識」という視点から考察する。地域の社会教育事業に参加した学生を対象にアンケート調査を行い、大学生は地域の社会教育事業に参加することにどんな意義を感じているのか、また、活動に際して時間的あるいは精神的な負担はないのかというメリットとデメリットの両面について分析し、大学生の参画を促進するための協働体制の一例を紹介する。

3. 研究の内容

KOMPISの部員が任意で参加した4つの行事を対象に研究を進める。まず、三島市の運営する「みしまっ子体験塾」と「放課後子ども教室」に参加する。次に、その行事を通して得られた小学生との交流経験を生かし、大学生が独自に企画運営する行事として、大学の学園祭「富桜祭」において遊びながら学べるブースを開設し、12月には地域の小学生を対象に「ちびっこ国際教室」を開催する。その後、これら行事に参加した大学生部員を対象にアンケート調査を実施し、部活に入った理由、活動の時間的・精神的な負担度、および活動のメリット等について調査する。その結果を分析することにより、大学生の社会教育事業への参画の意義と持続可能な協働の形態を考察する。各行事の概要は次の通りである。

(1) みしまっ子体験塾

三島市生涯学習課は、子どもたちが野菜料理教室、里山体験、古墳探検、陶芸など、三島市内の施設を訪問したり三島市で生産されているものを活用したりして体験型の学習をする「みしまっ子体験塾」を開催している。5月から2月まで年6回開催され、対象は市内在住の小学校4年生から6年生までである。普段はできない体験を楽しむ機会であるため、毎回20人程度の定員を満す参加者がある。大学生は指導ボランティアとして参加する機会が与えられ、遊び相手をしながら小学生の活動のサポートをする。この指導ボランティアは静岡県青少年指導者級別認定事業として認められており、2019年度のボランティア活動は、1回3.0時間から7.75時間まで、合計41.8時間の機会が設けられた。ボランティアに参加した時間数は研修実績としてカウントされ、20時間以上参加すれば、静岡県教育委員会より青少年指導者の「初級認定」が受けられ、更に35時間以上の実績を積み上げれば「中級認定」が受けられる仕組みになっている。

(2) 放課後子ども教室

三島市生涯学習課は、静岡県教育委員会の政策を受け、2017年度から2018年度までの2年間、市内の各小学校やボランティア団体等と連携を取りながら開催の定着化を図ってきた。静岡県教育委員会が推進する放課後子

供教室とは、子どもたちが地域社会の中で健やかに育まれる環境を作るため、地域の大人の参画を得て、放課後や週末等に小学校や公民館などを活用したスポーツ、文化活動、地域住民との交流、学習等の機会を提供するものである。教室の活動方針や時間、回数、場所、内容等は地域のニーズや実情に合わせて実施するとされており、三島市も市内の各小学校で「放課後子ども教室」を開催し、小学校や参加団体等の意見を聞きながらニーズに合った運営方法を模索してきた。KOMPISも、その試験的な期間である2017年度から2018年度にかけて「放課後子ども教室」に参加しており、各年度2、3回ずつ市内の小学校を訪問し、留学生を参加させた国際的な学びや外国語を使用したゲームなどを通して小学生と交流した。2019年度より「放課後子ども教室」の計画や実施は学校ごと地域学校協働本部の自立的な運営に任されており、KOMPISは以前訪問したことのある東小学校支援地域本部から直接依頼を受け、放課後学習支援とリクリエーションに参加する形となった。7月、9月、12月の3回の開催について参加の誘いを受け、そのうち9月の開催時にリクリエーションの全般的な企画運営を任された。

(3) 富桜祭

「富桜祭」は、日本大学国際関係学部が毎年10月下旬または11月上旬の週末に開催する学園祭である。今年度、KOMPISは「オリンピックとパラリンピックを知ろう」というテーマで、オリンピックとパラリンピックの歴史、競技内容、政治的背景、トリビア、クイズ等の展示や、射的とパラバレーボールの競技を体験するコーナーを設置した。子どもだけでなく、学生や大人の全ての人を対象とした。

(4) ちびっこ国際教室

「ちびっこ国際教室」はKOMPISが年度の活動の集大成ともしている行事であり、毎年12月に開催し、今年が6回目となった。第1回の参加者は大学生スタッフが20人程度で小学生を35人募集して始まったが、年々参加者が増え、第3回にはスタッフが80人、小学生も80人以上の応募があった。しかし、大規模な開催は費用や片付けの負担も大きかったため、それ以降、スタッフは50人程度、小学生の定員は70人程度と決めて開催している。毎回異なるテーマを設定しており、今年は「Once Upon a Time ～本を通して世界を旅しよう～」と題し、子どもたちがグループごとに「人種差別」、「物を大切に」、「地球環境」、「思いやり」の4つのブースを順番に回り、体験しながら学べるアトラクションを考えた。「ちびっこ国際教室」はKOMPIS発足のきっかけとなったものであり、現在でも部活の中心的活動と捉えている部員が多い。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

- A. 5月～2月 みしまっ子体験塾に参加 (6回)
- B. 7月～12月 放課後子ども教室に参加・企画運営補助 (3回)
- C. 12月 第6回ちびっこ国際教室を開催、アンケート調査実施
- D. 1月 報告書作成

(2) 実際の内容

上記計画は全て予定通り遂行された。

(3) 実績・成果と課題

昨年度の研究では、社会教育事業への大学生の参加が子どもたちに知識や体験を得る機会を与えるだけでなく、お兄さんやお姉さんのような存在である大学生と接することに安心感を与え、グループ活動の中でクラスや学年の違う児童と協働作業をすることで社会性を育てるという精神面での成長にも役立つという結果が見出された。本研究では、大学生が社会教育事業への参加をどのように受け止めているのかを調査し、今後も行政と連携をしていく上で持続可能な活動であるのかどうかについて検証するため、行事に参加したKOMPISの部員を対象にアンケート調査を行った。部員は29人いるが、行事開催直後に冬季休暇が始まったことや4年生が帰省したこともあり、有効な回答が得られたのは10人であった。その回答をもとに、1) 新入部員の募集、2) 部活動における負担感、3) 部活動のメリットの3点について考察した。

①新入部員の募集

活動を続けるためには、ある程度の部員数を確保しなければならない。そのために現在の部員がどのような目的で入部したのかについて調査した。「KOMPISに入った動機は何ですか」という問いに対し、「友人に誘われた」が4人、「ちびっこ国際教室 (以下、ちび国) に参加したい」、「子どもと触れ合いたい」、「国際的なことを

したい」が各2人、「ボランティア経験があるから」と「留学経験を生かしたい」が各1人であった。最も回答が多かった「友人に誘われた」と答えた部員の中には、「友人にちび国のことを聞いた」と述べている部員もいた。

「留学経験を生かしたい」という意見も、「放課後子ども教室」や「ちび国」で国際的な経験を生かしている先輩や友人の様子を見てのことである。高学年ほどKOMPISと「ちび国」との関わりを理由にあげる傾向が強かったことから、実際に行事を開催している様子を見たり、友人に誘われたりして興味を持つ学生が多いと考えられる。「ちび国」には部員でない学生もスタッフとして参加しているが、高学年の2人の部員は「ちび国の準備のためにKOMPISに入部した」とも述べていた。以上のように、具体的な行事参加を部活入部の目的としている学生が多かった。そこには体育会系の部活にも似た強い意志を感じ取れる。具体的な行事の様子や取り組む意欲を伝えることにより、他の学生の興味を引いていることがわかる。

②部活動における負担感

部活動に力を入れすぎて学業がおろそかになるようでは行き詰りが生じる。時間的、あるいは精神的な負担があるのかについて質問した。「部活全体として時間的な負担度はどの程度だったか」という質問に対し、「ちび国の準備は大変だったが価値のある時間だった」と答えた部員が4人、「部会が週1回なので特に負担ではない」が3人、「全く負担は感じず、価値のある時間だった」、「学業に支障はなく、自分がやりたいと思っているので楽しいし、価値がある」、「ちび国前後は少し支障をきたしていたが、部活全体としてはそれほどでもない」がそれぞれ1人だった。週1回の部会は活動時間としてほどよいが、「ちび国」前後は負担があったと感じている部員が多かった。しかし、この問いに対して、10人中5人が「価値がある」という言葉を用い、他にも「有意義だった」、「達成感があった」という言葉が見られた。時間的な負担があることも肯定的に捉えている。達成や成長のためには多少の負担感も必要だと感じている部員が多い。

精神的な負担感については、「部活で難しいと感じたことは何ですか」という質問に対し、「スケジュール合わせ」が2人、「周りの人のように意見やアイデアが思い浮かばない」、「苦手な人と一緒に過ごすのはまだ難しいと感じる」という自分の能力の問題を取り上げた部員が2人、また、3人が先輩という立場から「チーム全体の士気を高めること」、「後輩に積極性や主体性を持ってもらうこと」、「自分が持っていたつながりや事務的なことを引き継ぐこと」に難しさを感じたと述べていた。どの意見からも、自分の役割を自覚して責任感を感じている様子うかがえる。行事の感想に関する質問の中で、「後輩たちが各自の割り当てを与えられたことで責任感を持ってくれた」という意見もあったことから、各部員に仕事を与えるという部活の体質が各自の責任感や主体性を育てていることがわかる。

③部活動のメリット

まず、各行事についての感想を聞いた。行事に参加した人数は、「ちび国」が10人、「みしまっ子体験塾」と「富桜祭」は9人ずつ、「放課後子ども教室」はアンケート回答者の中では1人のみであった。部会以外の行事参加は任意となっているが、時間の許す限り、部活動として参加するという態度が見られる。

「みしまっ子体験塾」の感想として、「三島のことを知ることができた」、「子どもたちと一緒に三島ならではの様々なことが学べて楽しかった」、「子どもたちにまぎって活動する中でたくさんの発見があった」、「子どもたちのサポートをしながら自分も同じように発見や楽しさがあった」、「地域の子どもたちと触れ合いができてよかった」、「子どもたちと仲良くなれてよかった」、「楽しく、あつという間だった」、「楽しかった」、「ちび国と富桜祭に向けて子どもの特徴をつかむことができた」、「子どもの学びや興味の方向を知ることができ、ちび国に活かせた」という意見が出された。これらの中で共通して見られるのは、「子どもとの触れ合いが楽しい」、「行事自体に学習要素がある」、「ちび国に向けての準備となった」という3つの要素であり、これら要素は全てが関係し合っている。専門家である指導員のもと、子どもと一緒に学びの体験をすることにより、子どもの視点で学ぶことの楽しさを知った。子どもが何を発見しているのか、子どもに共感しながら自分も共に体験しているのである。また、「ちび国」などの行事開催に役立てることを既にイメージしながら参加している部員たちもいた。

「放課後子ども教室」については、「自分たちが行事の内容を考える中で、子どもたちの興味・関心やどのように楽しく活動できるかなどを考えるきっかけとなった」と述べている。また、一昨年度から参加している中で、行政や学校関係者と関わる機会ができたことに充実感を感じている学生も多かったようである。

「富桜祭」については、「子どもだけでなく、地域のお年寄りの方も来てくれたのが嬉しかった」、「他のイベ

ントとは違い、子どもだけでなく大学生も楽しめた」、「オリンピックの知識が増えたとし、大人の参加者と三島の大学について話せて新鮮だった」、「射的に子どもからお年寄りまで幅広い人が来て、楽しかったと言ってくれる人が多かったのが嬉しかった」、「大学の文化祭では無料で子どもたちが楽しめる場が少なく、子どもたちやその親御さんから好評で、やって良かったと思った」、「もう少し準備に余裕を持てば良かった」、「先輩からいろいろなことを学ぶことができた」、「1年生だけでブースを作り、いろいろと経験できてよかった」、「ちび国の宣伝ができる」という感想が出された。ここで特徴的なのは、幅広い年齢層の人との関わりを経験できたことに満足感を感じている部員が多かったということである。普段は子どもの行事を主な活動としているだけに様々な人との関わりに充実感を覚えたようである。今後の活動に関する質問に対しても「子どもたちだけでなく、大人とも交流できるようなイベント」や「中学生や高校生や高齢者の方にも幅を広げた活動をしたい」などという意見も出されていたことから、地域交流を幅広い視野で見る機会の一つとなっていることがわかる。

「ちび国」については、「準備は大変だったが、子どもたちに喜んでもらったのが嬉しかった」、「準備はとても大変だったが、本番に子どもたちが喜んでる姿が嬉しかった」、「達成感がすごくあった」、「準備などが大変な分、とても大きく楽しいイベントになった」、「毎年様々な国のことだけではなく、教えるなどでたくさん学べることもあるイベント」、「企画から始まり、その中で子どものことを考えながらの内容・構成の組み立てや場所や後援補助金等の申請手続きを経験し、多くの方と関わることができ様々なことが勉強になる」、「自分たちで企画する難しさ、楽しさを知った」、「人との交流が増えて良かった」、「初めての参加で右も左もわからなかったが、先輩たちの助けがあり楽しく終わることができた」、「ちび国を通して、わかりやすい伝え方、マネジメントなど学びが多かった」、「学生にとっても子どもにとっても、学び、経験、出会い、企画、運営等、様々なものが得られる最高の機会であると思う」、「毎年来てくれる子どもの成長が見られた」という感想が出されていた。他のイベントよりも、苦労と達成感という二つの性質が強いイベントであることがわかる。設定されたものではなく、一から十まで自分たちで作上げる難しさと楽しさの両方を味わっているのである。

最後に、部活動全体としての活動のメリットに関しては、「部活の仲間と協働することにより得られたことは何ですか」という質問に対し、「他の人と一緒に作業することでより良いものが出来上がった」、「主体性が身に付いた」、「経験や環境の異なる人と意見交換することで、新しい知識や考え方が共有できた」、「先輩方からたくさん学ぶ」、「個性豊かなメンバーと仲良くなれて視野が広がった」、「楽しい時間が得られる」、「協調性ができた」、「自分は何が得意かを知り、他の人に頼ることも学んだ」という意見が出された。これらを整理すると、他の人から学び（異文化体験）、自分自身を知り（自己発見）、同じ目標に向かって協力し（チームワーク）、楽しめた（娯楽）という4つの要素が含まれている。

(4) 今後の改善点や対策

今回のアンケート調査の回答には、部活動に対して否定的な意見が一つも見られなかった。部員たちは部活動のあり方に絶えず修正を加え、自分たちに合った活動形態を作り上げているようである。今後の活動内容については、上記回答にもあったように、地域に対する視野を広げ、幅広い層の人々との交流を持ちたいと考えているようである。子どもの行事を通して、年齢層や国籍などが異なる人々とも関わりを持ってきた経験を活かして、ユニバーサルな交流の場を提供するよう企画している。

5. 地域への提言

本研究により、地域の社会教育事業に関わることに對して、大学生自身が意義を感じていることが明らかとなった。その裏には自分たちで作上げる行事の開催という大きな目標があり、部活内の先輩と後輩、同学年の仲間、更には部活の外での交友関係を利用して他の部活などとの連携も行われていた。部活動という形態はそのような自由なネットワークの構築を可能にしている。ゼミとは異なり、単位にもならない活動であるが、それ以上の達成感が得られるようである。実際、「みしまっ子体験塾」に関しては青少年指導者の認定が受けられ、部員たちもメリットを感じている。しかし、「認定制度がなくても行事に参加するか」という問いに対して全員が「参加する」と答えた。行政や地域との関わりは大学生にとって貴重な経験の機会となっている。

6. 地域からの評価

本研究は三島市生涯学習課との連携のもとで遂行された。KOMPISが大学生側の窓口となることで各行事への参加要請や連絡がスムーズに進み、参加態度についても熱心に取り組んでいると高評価をいただいた。